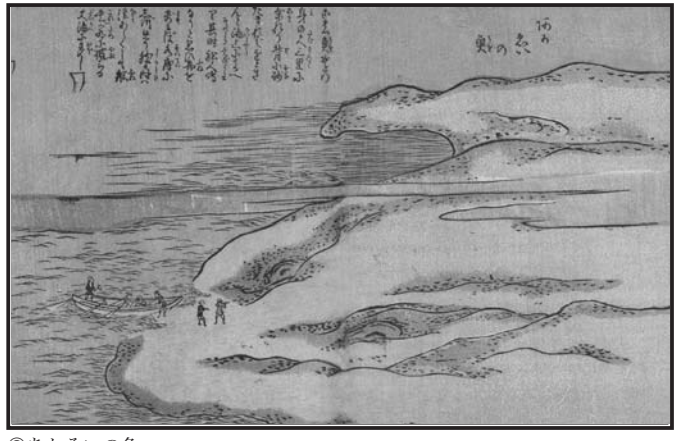
赤えいの魚

あかえいのうお

後巷説百物語

後巷説百物語



◎あかゑいの魚

この魚その身の尺三里に余れり
背に砂たまればをとさんと
海上にうかべり
其時船人嶋なりと思ひ舟を寄れば
水底にしづめり
然る時は浪あらくして
船是が為に破らる
大海に多し

――繪本百物語／桃山人夜話巻第三・第廿四

1

昔。

小さな島が御座いました。

その島には、あまり裕福ではない人人が、細細と身を寄せ合って暮らしておりました。

貧しくとも平和な島で御座いました。

島の一角には古い、小さな鎮守のお社があり、そこには何時の頃からか、蛭子神がお祀りされておりました。島民達はそのお社を心の拠り処とし、熱心に信心していたので御座います。

ただ、島にはひとつの言い伝えが御座いました。

それはそれは、兇ろしい言い伝えで御座います。

蛭子神のお社には、ご神体として一体のゑびす様の像が安置されておりました。

そのゑびす像のお顔が赤うなる時は、島を兇ろしい災厄が襲う、ゑびす様の面色が赤色に染まった時は、島が滅ぶ時なのだと、そう伝えられていたので御座います。

誰もその言い伝えを疑うものは御座いませんでした。

何故なら、島民達は蛭子様を心から崇めていたからで御座います。

島民達は朝夕の参拝を決して欠かすことなく、ことある毎にそのお社にお参りをして、慎しく暮らしていたので御座います。

しかし。

ある時――。

ひとりの若者がおりました。

血気盛んな若人で御座います。

若人は、因習に雁字搦めに囚われている島の気質に厭気が差しておりました。貧しい暮らしに飽いてもおりました。諾諾と日日を送り不平のひとつも言わぬ島の人人に落胆してもおりました。そこで――。

若者は悪戯をしたので御座います。

こともあろうに――夜半に鎮守の社へと忍び込み、ゑびす様のお顔に赤赤と朱を塗りつけたので御座います。

朝になり、お顔が赤くなったゑびす様を見た島民は大いに愕き、惧れ、慌てふためいたので御座います。誰もが信じておりました。心から信じておりました。だから泣いて叫んで、大いに乱れ、結果島民の凡てが僅かな家財を纏め、家族を引き連れて島を出たので御座います。

若者はその様子を愉快に見守りました。

何しろお顔に色を塗ったはこの自分。何が起きよう筈もない。ナニ迷信じゃ、凡てはまやかしじゃと、腹を抱えて笑うておりました。

ところが。

島民が島を離れて幾もなく。

突如天地鳴動し、山は崩れ大地は揺らぎ、大津波が押し寄せて、若者諸共その島を呑み込んで仕舞ったので御座います。

島は、一夜にして跡形もなく消えてしまいました。

そして荒涼たる海原だけが残ったので御座います。

2

慶長元年丙申閏七月十二日晡時、天下大地震、豊亦處々地裂け山崩るゝが故に、高崎山嶺の巨石悉く落ち、其石互に磨して火を發す、既にして震ひ止み、府内の民皆心身を安んず、或は浴する者あり、或は夕飯を食する者あり、未だ食せざる者ある時、又鉅海大いに鳴動し響く、諸人甚だ奇に驚き、東西に奔り南北に逃る、或は海邊村里の井水を視るに、皆悉く盡く、時に巨海より洪濤忽ちに起き來り、府内及び近邊の邑里に洋溢し、大波三時に至る（中略）。是の如く大地震洪波に罹りて、府城大厦小宅民屋等大半倒破し人畜の死する者其の數を知らず（中略）。

且つ勢家村の二十餘町の北に瓜生島と名づくるあり、或は沖濱町と云う、其の町東西に縦りし南北に竝びて三筋町を成す、所謂南を本町、中を裏町、北を新町とす、農工商漁人住す、其の瓜生島の境内悉く沈没して海底と成る、之に因って溺死せざる者は纔かに其の七分の一、或は小船に漂ひ、或は流家に乗り、或は浮木に附し、或は流櫃に寄り、五輪互激に離散す、然れども流浮すること暫時にして、西南の山岸犬鼻の濱に到り、或は蓬萊山等の高地に到りて死を免るゝ者あり、頃刻にして大汐收まりて舊の如し云々——。

矢作剣之進は幾度か問え乍らもそこまで読み下し、どうだと言って笹村与次郎を見た。元は漢文である。韻を踏むでもなく調子を揃えてある訳でもない、意味が通るだけの下手な綴りであったようだし、写本ということもあり、誤字や誤記などもあるのだろう、他の者より漢籍には通じている筈の剣之進をしても、酷く読み難い様子であった。

それでも神妙に聞いていた与次郎が、それが件の『豊府紀聞巻四』かと問うと、左様これが貴様が欲しておった確たる証拠じゃと、剣之進は幾分満足げに答えた。

「善く見つけたであろう。新政府にはほら、南国の出身者が多いからな。署にも豊後の者がおる」

剣之進は豪快に笑った。

この剣之進という男、旧幕時代は南町奉行所の見習同心であったのだ。ご一新のごたごたをどう乗り切ったものか詳らかではないが、現在は出来たばかりの東京警視庁の一等巡査になったばかりという身分である。

一方の与次郎はといえば——元は西国の小藩、北林藩の江戸詰め藩士だったのだが、今は加納商事なる貿易会社に奉職しているという変わり種である。

剣之進は見習同心時代に北林藩邸に足繁く出入りしていた。口を利いた契機は覚えていないが、齢が近い所為か馬が合うのか、与次郎はその頃からずっと親しくしている。要するに腐れ縁という奴である。

何だ思った程喜ばぬなと言って、剣之進は太い眉を寄せた。

「おい与次郎。折角苦労して手に入れたというに、もう少し反応したらどうなのじゃ。吾輩は散散な評判だったその方の妄言をわざわざ証明してやったのだぞ」

剣之進は続けて、どうじゃこれで方方も信用したかと一同を順に見回した。

十畳程の座敷に若い男が四名、面突き合わせて座っている。膳が出ているでもなく、酒器の類も見当たらぬ。改まった席とはとても思えぬが、砕けた感じもなく、何とも不可思議な会合である。

「まあ――その書き上げを信用する限り相当の被害であったようだがな。地震い山崩れ、津波洪水など、天変地異で沢山の犠牲が出ることは珍しいことではないぞ」

発言したのは倉田正馬である。

これは旗本の二男坊、徳川方の重臣を父に持つという箱入り息子で、しかも洋行帰りというハイカラである。ただ、どうにも茫洋としたところがあり、とても洋行帰りの冴えは感じられぬ。風体も洒落ている訳ではない。

この男、実は与次郎の元同僚なのである。正馬の父親である元幕府の重鎮というのと与次郎の奉公先の経営者というのが昵懇の仲で、その縁で正馬も一度は与次郎と同じ貿易会社に入ったのである。ただ正馬の方は働くのは性に合わぬと三日で辞めてしまった。今も働かずにぶらぶらしている、謂わば無職の遊民である。

「広く海外に目を向けるなら、更に規模は大きくなる。未曾有の惨事の記録など、然したる苦労をせずとも到るところに見出せるぞ」

正馬がそう続けると、そう幾度もあったのでは未曾有とは呼べまいと言って、渋谷惣兵衛が笑った。

この惣兵衛、与次郎同様北林の出身なのだが、幼き頃に養子に出され、山岡鉄舟に剣の手解きを受けたという豪傑で、維新後は猿楽町で町道場を開いている。どれ程の腕なのかは与次郎も与り知らぬが、慥かに強そうな外見ではある。しかしこのご時世、剣術使いで飯が喰える筈もなく、道場は閑古鳥、警察に出向いて巡査相手に稽古をつけている、警察の剣術指南役である。

「未曾有とは未だ曾て有らずという意味じゃ正馬。過去に一度でも例があるならば、それは未曾有とは呼ばぬわい」

「それはそうだが、これはものの喩えだ。堅苦しいことを言って揚げ足を取るな。これだから古臭い剣術使いは困るな。良いか、俺が言いたかったのはそんなことではない。そう――富士が火を噴いた折りなど、いま矢作が読み上げたどころの騒ぎではなかったと聞くぞ。海外では一夜にして山が消し飛んだ、村が埋没したという話もそう珍しゅうはないのだ。俺はそういうことを申したかったのだ」

それは貴様の言う通りだがなと惣兵衛は言う。

「大きな地震いが起きたなら山も崩れようし海も溢れよう。島のひとつも沈むであろう。天変地異が如何に人の理解を超えた猛威を振るうかは、北林の者であれば、誰でも知っておることだ」

そうであろう与次郎と惣兵衛は言った。
「我等が故郷、北林のお城の背後には山と見紛うばかりの大岩が、でんと突き立っておるのだが、その大岩はな、元はといえば背後に聳える金山の山腹にあったものなのだ。あのように巨大なものが落下して来るなど、普通は信じ難きこと。儂など童の頃より何度聞かされても信じられなんだ。あれが落ちるなら、島が沈むこともあり得るであろう」
如何にもそうだと与次郎は答えた。
「まあ――珍しいことでもないとは思うよ。しかしそれが何だというのだ」
だからなと正馬が答える。
「その記録に依れば、被害が大きかったのは寧ろ本土の方で、その沈んだ島の者は八割方が助かってはおるようではないか。土地家財は失ったのだろうから被害額は甚大だったであろうが――島ひとつ沈んでその程度の被害で済むかのう。まあ、慥かにそうした災害はあったのかもしれぬがな、のう巡査殿――」
どうだろうなあと正馬は問う。
どうだもこうだもない、被害の規模は問題ではなかろうと剣之進が不服げに応じた。
「与次郎の聞いた話でも、島民は助かっておるではないか。事前に察知して皆逃げたと、そういう話であろう」
のう与次郎と剣之進は問う。
まあそうだと与次郎は応えた。

そうかのうと正馬は首を傾げる。
「何を疑う。この記録は与次郎が聞いた言い伝えと同じ島の記録なのだぞ」
剣之進は憮然として言った。
「そうであろう与次郎。貴様が聞いた言い伝えで沈んだとされる島は――豊後国瓜生島だったのだろうが」
そうだと与次郎は答える。その通りである。
「それを手繰って手に入れたこの記録にもこう書き記してあるではないか。これが偶然とは拙者には思えぬ」
まあ偶然ということはなかろうと惣兵衛が応じた。
「同じ場所なのなら、まあ関係はあろう」
「関係あるわい。同地の寺院である威徳寺の由来書なる書面にも同様の記述があるというのだ。その時流されて来た松樹一株が同地の寺院威徳寺境内に植えられて根付き、後に名松と謳われるまでになったと申すのだな。また『豊國小誌』などを繙くに、矢張り同様のことが過去あったと書かれておるらしい。近隣の別の島もな、慶長三年の夏に鶴見山の破裂で沈んだと記されておる。だから与次郎の聞いて来た――恵比寿の顔が赤くなり、その瓜生島が滅んだという伝説は――事実なのだ」
それは飛躍じゃと正馬が言った。
「何故だ」

「何故も何も、恵比寿云々のことはその記録にはないのだろう」
「いや、記録はなくとも社はあるそうだ。俺の調べたところに依れば、その蛭子神社と申す社はな、後に旧瓜生島の対岸にあたる勢家の地に再度祀られ、それは今も残っておるというのだ。ならば矢張りこれは事実と考えるより――」
「いやいや剣之進――貴様の言うことも解らぬでもないがな――」
惣兵衛は取り成すような仕草をする。
「――一方で面妖な言い伝えがあり、その噂を辿って行くうちに、それを裏付けるような記録を見つけてしもうたなら、儂も貴様のように思うたやもしれぬわ。しかしな剣之進。善ッく考えてみるが良い。その言い伝えの方が――後から出来たということはないか」
言い伝えが後とはどういうことじゃと剣之進はいっそう憮然とする。
「言い伝えと申すものは普く事実が元になっておるものであろうが。某かの史実を後世に語り伝えたものが、それ即ち言い伝えじゃ。元となる事実がない場合は風聞や迷妄と申すのだ」
そうではないそうではないと惣兵衛は手を振る。
「貴様の言う通り、言い伝えというのは必ず事実の後に出来るものだろうて。だがな剣之進、儂が申しておるのはな、その――与次郎が聞いて来た、島が沈んだという言い伝えのことではない。その、昔話の中の言い伝えのことだ」
「昔話の中の言い伝えとは何じゃ」
惣兵衛は呆れたような顔になり、だからな――と、噛んで含めるように言った。

「その――恵比寿像の顔が赤くなると島が滅ぶという言い伝えだ。その迷信が、事実その瓜生島に伝わっていたのかどうか、それは判らんと、そういうことだ。そんな記述はなかろうて」
「それが――島が沈んだ後から出来た言い伝えだと申すのか」
そういうことじゃと惣兵衛は言った。
それに就いては何も断言出来ぬがなと、剣之進は納得出来ぬ素振りを見せる。
惣兵衛は困ったような顔をする。
「まあその、瓜生島か。その島が一夜にして海中に没したと申すのは、事実なのかもしれぬ。否、そうした確固たる記述も残っておるのだから、これは事実なのであろう。しかしな剣之進。与次郎の話に出て来る――その、悪戯者が恵比寿像の顔を赤く塗っただとか、その像の顔が赤くなると島が沈むという言い伝えがあったのだとか、それまでもが事実とは限らぬと、儂はそう言うておるのだ」
正馬は相槌を打ち、言い伝えというものは得てしてそのような尾鰭がつくものだからなぁ、と言った。
どうしても信用せぬのだな、と剣之進は不服そうに文書を閉じて懐に仕舞った。まあそう怒るな巡査殿と正馬が宥める。
「信じぬのではない。嘘だと決めつける証拠は何もないのだからな。ただ同じように信じる決め手もない。要するにその文書は、与次郎の聞いた話が事実だという証拠にはならぬと、渋谷はそう申しておるのだ。そうであろう」

そうよなあ、と惣兵衛は後ろに引いた。
「それは正馬の申す通りじゃ」
「のう矢作、お前の言う通り、慥かに問題なのは災害の規模などではないだろう。しかし同時に、災害が実際に起きたか否かということでもないし、そこに恵比寿信心があったかどうかということでもないのだ」
では何だと言うのだ正馬、と剣之進はいっそう不服そうにした。
「――何を証しとすれば良いというのだ」
「いいか矢作。我等が問題にしておるのは、あくまでその――恵比寿像の変化と天変地異との因果関係にあるのだ。俺はそう思うが」
それはそうだがと剣之進は考え込む。
それは証明出来ぬであろうと正馬が言う。
何故じゃと剣之進は尋き返す。
「いや、それは無理というものだぞ矢作。縦んば言い伝え通り、その島には恵比寿の像が祀られておったとしよう。ならばその顔が赤くなると災厄が起きると伝えられていたのかもしれぬ。更に不埒者がそのお顔を朱で塗るようなこともあったのかもしれぬ。いやいや、その直後に頃合いよく天変地異が起きたのかもしれぬわ。そうだとしても、即ちその災害がその悪戯の所為と断ずることは出来ぬことであろう」
「では何だと申すのだ」

偶然だと正馬は簡単に答えた。
「ぐ、偶然と申すか」
「俺はそう思う。矢作、先程お前はこれは偶然ではないと言ったな。渋谷もそう申しておったが――それはその面妖な言い伝えと、そこな文書の関係が偶然ではないと申したまでのことであろう。天災は常にこの世の理に則って起きるのだ。神像仏像に朱を塗っただけで天地が動くなどということは考えられぬことじゃ。どれだけ頃合いが良かろうとも、地震や津波と悪戯や信仰は矢張り無関係なことであろう。人の力で――天地は動かせぬ」
「恵比寿神は人ではないぞ」
塗ったなあ人間だと惣兵衛が言う。
いや、そもそも神仏を持ち出しても同じことだと思うがなと正馬は続けた。
「同じとはどういうことだ」
「同じだよ。渋谷が先程言っていた通り、先に天災があって、後から理由が作られたのでない限り――両者に因果関係は発生せんだろう。俺には偶然という結末以外考えられぬな」
ううむと剣之進は唸った。
「それにな、俺の聞く限り、その話はどうにも出来過ぎておるように思うのだ。信心せぬのは良くないことだ、人を欺くのはいけないことだと――妙に説教臭い気がせぬかな。真面目に信心している者は助かり、不真面目な者だけが命を落とす――この結末に俺は信者を集めようという、そう、思惑のようなものを感じるのだがな」

「そんな大きな神社ではないらしいがな」
「大きさはそれこそ関係なかろう」
惣兵衛が追い討ちをかけるように言った。
「過去の惨事を霊験の証(あか)しに仕立て直すことは、その地に於(お)ける信仰心を高めようとするならば極めて有効なことではないか。小さな社(やしろ)なのであれば、地元の信心が集まれば良いのだからな」
「もしも」
正馬は続ける。
「本当に、島が沈んだのは恵比寿の顔を赤く塗ったからだとしようではないか。しかしその場合も――」
証明は絶対出来ぬのだと正馬は結んだ。
形勢不利と見たのか、剣之進は唯一異論を唱えないでいる与次郎の方に顔を向けた。
「どうなのだ与次郎。こ奴等は貴様を虚仮(こけ)にしておるのだぞ。何か言うたらどうなのだ」
「いや――」
反論はなかった。
剣之進は憤慨しているようだが、与次郎自身には虚仮にされているとも思えなかった。どう考えても正馬と惣兵衛の方が正論を述べているからだ。
ことの起こりは半月前のことである。

酒の席で与次郎が知人から聞いた珍奇な伝説を語ったのが始まりだった。
赤面恵比寿の――沈んだ島の話である。
与次郎にしてみれば単なる座持ちの与太話のつもりだったのだが、文明開化のご時世にそんな非合理な話はあり得ないと、正馬と惣兵衛は強く否定したのだった。しかし剣之進だけはあり得ることじゃと言い張った。その結果の今日である、正直言って与次郎は、剣之進がこんな証拠めいた書き付けを見つけて来るとは全く思っていなかったのである。与次郎は神仏の威徳を信じぬこともないのだが、島ひとつ沈んだとなれば話は別だ。
その与次郎と剣之進の顔を見て、惣兵衛は一度顔を顰(しか)め、如何(いかが)かなご一同――と言った。
「ここは薬研堀(やげんぼり)のご隠居にご意見を求めてみては――」
四人は顔を見合わせ、おう、と言った。

3

薬研堀の隠居とは――。

その名の通り、薬研堀界隈に九十九庵なる閑居を構える老人のことである。

齢の頃なら八十幾つか、鶴の如くに痩せ細った色白の老爺で、髭を落とした白髪を短く刈り込み、墨染の作務衣に鼠色の袖無しを羽織ったその姿は、恰も禅僧と見紛うばかりに枯れ果てている。素姓本名は一切知れぬが、自らを一白翁と号し、遠縁だという若い娘と二人きりで暮らしている。

この老人、与次郎が禄を食んでいた旧北林藩とは浅からぬ縁を持つ者であったらしい。

どこから見てもただの町人、身分職分ある身とは到底思えないにも拘らず、何故か藩主の覚えもめでたく、ご一新前は藩から恩賞金まで受けていた。与次郎はその金を月月届ける役目を任されていたのである。

高額ではなかったが、幾年も前からのことであったらしく、総額となると大した額になる。

一白翁は己のことを何も語らなかったが、前の上役の話に依れば、藩を救った恩人なのだということだった。

一介の町人の、しかも枯れ木の如き翁なんぞに、仮令小さきと雖も国ひとつ救ったり出来るものかと、与次郎は随分と訝しく思うたものだが、それはどうやら与次郎の生まれる遥か前、四十年以上も昔のことであるらしかった。

現在は老人であってもその頃は若かったのだろうと、そんな当たり前のことに与次郎が気づいたのは、藩がなくなってしまった後のことだった。それまで与次郎は何故か、この老人は昔からずっと老人だったような、そんな無茶な妄想に取り憑かれていたのである。

それ程に、一白翁は枯れていた。

ハテあの枯れた老人はどうしているものかと、思い至ったが五年前である。

大政が奉還され、藩が廃されてしまったのだから、当然北林藩から出されていた恩賞もなくなってしまった筈である。

ならば、喰うに困っているやもしれぬ。

そして与次郎は、矢張り北林藩と縁があり、老人の噂を聞き知ってもいた惣兵衛を伴って、九十九庵を訪ねてみたのだった。

老人は健在だった。

髭こそなくなっていたものの、痩せた顔も質素な暮らし振りも、偏屈なのか好好爺なのか判じ兼ねる物腰も、一白翁は旧幕時代そのままの佇いでそこにいた。ただ、与次郎が通っていた頃はほんの小娘だった遠縁の娘がすっかり年頃になっていたという以外、九十九庵の中はその昔と何ひとつ変わってはいなかったのである。

以来五年に亘り、与次郎と老人との付き合いは続いている。今では惣兵衛の他、剣之進や正馬までも一緒に九十九庵を訪れることが多い。

老人は博識だった。しかもそれは奇妙な体験談を随分と沢山持っていた。与次郎はその、含蓄のある話を聞くのが愉しかった。

維新から十年。

そこここで動乱は続いていたが、世相の混乱は一段落した感がある。しかしこの国も、与次郎自身も、大きく変わった。町並みも、世情も変わった。しかし老人の棲む町のその一角だけは、いつまでたっても江戸が残っている。新しい時代に馴染もうと努力する反面、どこか新しいものに対する不信感を捨て切れない与次郎のような男にとって、九十九庵の風景と、一白翁の語る江戸の話は、懐かしく落ち着くものだったのである。

剣之進は巡査という身分であるにも拘らず珍談奇談の類が無類に好きだという困った男で、老人の語る諸国の怪異譚を特に喜んだ。

一方惣兵衛は顔や生業に似わぬ合理主義者で、不可思議な事象に関して老人とあれこれ議論を交わすのが娯しいようだった。少少西洋気触れの正馬はといえば、まあそうした談議問答も厭いではなかったのだろうが、これは同居人の遠縁の娘である小夜が目当てなのだと、与次郎はそう勘繰っている。

ただ、これに関しては――与次郎も含めて――他の二人とても怪しいところなのだが。

土産に饅頭を買って四人は薬研堀へと向かった。

夕食時に饅頭もないとは思うが、老人は酒を呑まないから土産も買いようがないのだ。いや、正確には毎日寝る前に升酒を一杯だけ呑むのだそうだが、それ以外、酒は一滴も口にしないのである。かといって、取り立てて甘いものが好きということもなさそうなのだが――要するにこれは小夜への土産なのである。

生け垣越しに小夜の姿がちらりと覗いた。

蒸し暑いので打ち水でもしたのだろう。柄杓と手桶が見えた。正馬が小走りに門に向かう。門に達する前に御免くだされ御免くだされと惣兵衛が濁声を発した。与次郎が門を潜ると、小夜は玄関の脇に置かれた少し壊れた籐椅子に座ってぽかんとしていた。

また来ましたぞご老人はご在宅かと剣之進が言う。小夜が答える間もなく、正馬がつまらぬものですがと饅頭の包みを差し出した。

いつもすみませんと立ち上がった小夜が受け取る。

こちらこそすみませんと与次郎は言った。お夕飯はお済みですかと問うと、今し方食べ終わったようですと小夜は答えた。いつもいつもご迷惑でしょうなと与次郎が問うと、構いませんわと小夜は答えた。

「丁度お茶を飲みたがる頃合いですから。それに、皆さんとお話しさせて戴いた後は少しばかり元気になるようですし」

小夜はそう言って、与次郎達を裡へ招き入れた。

四人組は座敷ではなく、離れに通される。

六畳程の小さな部屋で、真ん中には囲炉裏が切ってある。躙り口はないけれど、茶室の如き印象の小部屋である。老人はその床の間の前にちんまりと座り、客と応対するのが常である。

老人は細い眼を更に細めて、笑っているのか戸惑っているのか判らぬような表情をした。

「お揃いで――何事で御座いますかな」

「相談ごとで御座いまするわい、ご老体――」

粗野な口調で惣兵衛が言う。続けて剣之進がご機嫌を伺い、最後に正馬が世辞を言うというのが、毎度毎度の展開である。

与次郎は大抵何も言わずに端に座る。

いつもの如く並んで座り、茶が出されて後、最初に口火を切ったのは剣之進だった。

「実はご老体、本日は他でもない、この与次郎が聞いてきました噂の真偽に就きまして、ご意見を拝聴したく思い罷り越した次第で」

老人ははいはいと頷いた。

剣之進は瓜生島の伝説に就いて語った。しかし多くを語るまでもなく、老人はその話を詳しく知っていたようだった。ご存知ですかと正馬が問うと、有名な話ですからなと老人は答えた。

「有名なのですか」

「さて、似たような話は瀬戸内にもあるが――」

矢張り豊後湾の話が有名でしょうなあと当たり前のように老人は言った。

「瀬戸内にもあるのですか」

「阿波を訪ねた折りに聞いた話が似たものでした。まあ、その手の話は多多御座います。しかし規模からいうと、その瓜生島が一番大きいのではないでしょうかな。何しろ島には千軒からの戸数があったと――私は記憶しておるが」

「千軒も――」

「そう。しかも貧しい島ではなかった筈だが。与次郎さんは貧しい島とお聞きになったかな」

与次郎はそう聞いた。頷くと、お話しになったのはお若い方でしょうなと老人は言った。慥かに若い。与次郎よりも二つばかり年下の男である。

「ならば知らなかったのでしょう。私が聞いたところでは、恵比寿様のお顔を塗ったのは迷信を信じぬ医者坊で御座いましたしな。まあそれは仕方がないでしょう。三百年から昔のことで御座いますからなあ」

矢張り真実なのかと正馬が問うた。

それは判りませんと老人は答えた。

「私もこんな爺では御座いますが、三百年も生きてはおりませんからな。その、剣之進さんが見つけた記録とやらもね、まあ文字で書いてあるだけと思えば、どこまでが真実か、そんなことは判らぬことです」

むうと剣之進は膝の上の文書を手に取って見た。

「しかし――ご老体。記録も何も信じぬとなれば、この世に確かなことなどなくなってしまうではないか」